

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月 5日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21530724

研究課題名（和文）

臨床心理学的援助におけるアセスメント・スキルに関する研究

研究課題名（英文）

A Study of Assessment Skills in Clinical Psychology

研究代表者

森田 美弥子 (MORITA MIYAKO)

名古屋大学・教育発達科学研究科・教授

研究者番号：80210178

研究成果の概要（和文）：本研究では、心理検査を用いたアセスメント結果を、クライアントやその関係者にどのようにフィードバックするか、的確なフィードバックをするためにはどのようなアセスメント・スキルが必要とされるのか、アセスメント・スキルを育成するために有効な養成教育とはどのようなものか、を検討した。大学の実習授業や研究会で事例検討を積み重ね、初心臨床家にとっての困難点など特徴を整理し、新たに養成教育の中で活用するための資料、ワークブックを作成した。

研究成果の概要（英文）：The current study looks at assessment results based on psychological tests to examine: how best to give feedback to clients and the people around them, the assessment skills necessary to give accurate feedback, and modes of education and training that are effective in the teaching of assessment skills. A wealth of case data gathered over a period of time from university training courses and academic seminars was studied to identify attributes such as problem areas for novice clinical psychologists. The findings were summarized and used to produce materials, workbooks, and other documents that could be newly utilized in modes of education and training.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：臨床心理学

科研費の分科・細目：心理学、臨床心理学

キーワード：臨床心理アセスメント、心理臨床家の教育、心理検査、フィードバック

1. 研究開始当初の背景

臨床心理学的援助実践におけるアセスメントとは、何らかの心の問題を抱えて治療・相談機関を訪れた、クライアント（来談者）とその問題についての「見立て」を行うこと

である。臨床心理アセスメントは、心の問題をとらえ、援助していくための出発点として大変重要である。これまで数多くのアセスメント技法が開発され、臨床現場で活用されてきた。臨床心理士の養成訓練においても臨床

心理面接とアセスメントに関する学習は必須とされている。

アセスメントの具体的な目的は、事例によって異なるが、行動傾向やパーソナリティを理解する、病理水準や問題の背景を把握する、援助方針をたてる、経過の中で変化や効果をとらえる、などがあげられる。臨床心理士が行うアセスメントの場合、単に診断名をつけるのではなく、生活史的理解あるいは深層心理解釈にもとづいた力動的な見立てをすること、クライアント自身の気づきのプロセスや臨床家とクライアントとの共有作業が重視されていることが特徴である。

アセスメントの方法には、心理検査、面接、行動観察があるが、本研究では、主として心理検査を用いたアセスメントのプロセスに着目し、特に、「アセスメントの結果、得られた所見をクライアントやその関係者にどのようにフィードバックするか」「的確なフィードバックをするためにはどのようなアセスメント・スキルが必要とされるか」「アセスメント・スキルを育成するための臨床家養成教育はどうあるべきか」を検討する。

クライアントやその関係者に対して、わかりやすいフィードバックをすることは、治療的に有意義な協働関係を構築していくことに繋がる。ただし、多様な臨床事例において一律のマニュアル的な対応では通用しないため、臨床経験による熟達に頼り、十分な理論化がなされてこなかったという指摘もある。心理検査の実施・分析・解釈の技法習得については、臨床心理士養成指定大学院での実習や、卒後教育としての研修会等がかなり充実してきている。しかしながら、初心臨床家にとっては、技法の習得もさることながら、アセスメント結果を援助過程にどう活かしていくかという段階で最も困難を生じやすい。

そこで、本研究では、心理臨床の実践訓練中の大学院生たち、及び臨床現場でアセスメントを活用している臨床家とコラボレートしながら検討を進める。得られた成果を臨床教育に還元していくことで、実践の場に真に活かせる心理アセスメント学を展開、充実させていくことを目指していく。

2. 研究の目的

心理検査を用いたアセスメント（臨床心理査定）の結果として得られた所見をクライアントやその関係者にどのようにフィードバックするか、的確なフィードバックをするにはどのようなアセスメント・スキルが必要とされるのか、アセスメント・スキルを育成するために有効な養成養育とはどのようなものか、を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 先ず、文献検討により理論的枠組みを整理する。これまで臨床家のアセスメント・スキルやその育成に関する研究ベースの知見はほとんど見られないが、実践からの経験知として述べられてきた。

(2) 研究代表者および分担者は、大学院で「臨床心理査定実習」を共同で担当し、学部授業では「投映法演習」「検査法演習」をそれぞれが担当している。また、院生・卒業生を対象とした事例検討会を開催している。そこで初心臨床家から出された所見レポートの特徴、及びレポート作成プロセスの中で感じられた問題点等に関する意見を収集し、「アセスメントの結果データから所見レポートを作成し、フィードバックに至る過程」で、初心者が陥りやすい問題点を抽出して、質的分析を行う。

(3) さらに、心理アセスメントの実践教育内容を充実するために、アセスメント技法の基礎研究を行う。

(4) 以上を総合して、心理臨床家の養成過程におけるアセスメント教育の内容と手順について提言をまとめる。

4. 研究成果

(1) 心理検査によるアセスメント結果のフィードバックにおいて留意すべき点として、文献検討より諸家の実践理論として述べられてきたことを抽出し、以下のように整理された。

①何をフィードバックするか：クライアントにとって役立つフィードバックは何かを考えて、情報を取捨選択し、内容を吟味するために考えておくべきこと。

・クライアントの自己理解や治療意欲を促進し得る内容であること、

・すべてを網羅するのではなく、重要なことに焦点づけること、

・クライアントが知りたいことと、セラピストが伝えたいことのバランスを考慮すること、

・日常の行動や問題との関連付けた内容への、いわば翻訳作業も必要となること。

②どのようにフィードバックをするか：伝え方の工夫として考えられること。

・大前提としてわかりやすさをもつこと、

・信頼関係が構築されていること、もしくは伝えることでの関係構築をめざすこと、

・クライアントの受け止め方（理解力、情緒面での抵抗や思い入れ等の状態）を把握しておくこと、

・フィードバックによる影響について予測しておくこと、

・クライアントとの協働作業、共通理解の場としていくことが重要であること。

③とりわけ「関係性」の視点は重要と考えられた。アセスメントを行うことそれ自体が関わりの一形態であることから、心理検査を媒介とした半構造化面接としてとらえていくことができること、実施前後のクライアント・関係者・セラピストそれぞれの意図や思いが関連し合っただけで進んでいくことから相互関係の変化や影響を見ていく必要があることなどを考察として論じた。

(2)心理臨床家の養成教育、卒後教育のあり方を検討するため、研究代表者・分担者が担当する学部及び大学院の演習授業および研究会を対象とした検討を行った。

①初心臨床家により作成、提出されたアセスメント所見レポート(検査報告書)を分析し、初心者が陥りやすい問題点を整理したところ、特徴として、以下のことが見られた。

・専門用語が多用される傾向にあり、所見の読み手(フィードバックの対象)の立場にたつことの難しさがある、

・結果の一部のみが強調され、目立った特徴を中心に記述しやすい、

・客観的に得られた数値等の結果よりも検査実施時の印象が有意になりやすい、

・事前に得た情報(診断名等)に結果が引きずられやすい、結果から導かれる対応(処遇方針についての記述)が一般論的でパターン化しやすい。

②臨床家を対象として、提示された共通の1事例の心理検査ロー・データについて、どこから着目して、どのように被検査者の特徴をとらえていくか、研修会を兼ねて調査を実施した。

その結果、事例のプロトコルに対する着眼点(どこから見ていくか、特に注目すべき特徴はどこか)については臨床家間に大きな相違はなく、経験年数による違いも見られなかった。その一方で、所見レポート作成にあたっては、マニュアルに機械的に従った記述になりやすい傾向があり、ロー・データからとらえ理解したこととレポートに報告記述することにはギャップがあることが示唆された。

③これらをふまえ、アセスメント・スキルの養成教育における課題として、以下のことが確認された。

・体験学習(被検者体験、検査者としての実施、および事例検討)の重要性、

・検査結果として示される数量指標等の心理学的意味(解釈仮説)を知ること、

・実践現場に即した具体的な使い方(テスト・バッテリー、検査の選択など)についての理解を深めること、

・アセスメントの目的、その後の処遇方針との関連を意識しておくこと、

・検査結果、行動観察、面接情報を総合する視点をもつこと、

・事例検討と理論学習のバランス。

(3)臨床心理アセスメントの実践教育を充実するために、複数のアセスメント技法の基礎研究を行った。主にロールシャッハ法、描画法をとりあげ、スコアや指標の活用方法を再検討し、学会報告および論文化して成果を発表した。これらについては今後も研究継続していく予定である。

(4)最終年度には報告書冊子を作成し、フィードバックに関する文献検討、養成教育(授業、卒後研修)のモデル提示、アセスメント所見作成における初学者の特徴などの知見をまとめた。

初学者の場合、心理検査記録から被検査者の特徴として重要な点に注目し、それにもとづいて人物像をイメージアップすることは適切にできるが、所見レポートをまとめる際に、目立った特徴に影響されやすいため全体を過不足なく把握するのが困難であること、より客観性の高い指標にもとづく結果と印象レベルの解釈とが混在してしまうこと、総じて検査結果(回答、反応、指標など)とその意味するところ(解釈、現実行動との結びつき)の連関が十分に意識されていないことが問題として見られた。

本研究の報告書「臨床心理学的援助におけるアセスメント・スキルに関する研究」は、同時に作成した「ロールシャッハ名大法ワークブック」とともに、平成24年度からのアセスメント演習授業の中で副読本として活用し、養成教育に還元して、フィードバック・スキルの向上に役立てていく予定である。

有効な臨床心理アセスメントの実践プロセスを明確化していくことは、支援を必要とする方たちとの関わりである臨床心理学的援助全体の役割を明らかにすることにほかならない。臨床実践・養成教育・研究活動を三位一体として継続していくことにより、実践の学としての臨床心理学の発展に寄与していくことを目指している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

森田美弥子、2012年、臨床心理アセスメントにおけるフィードバックをめぐって、名古屋大学心理発達相談室紀要 27巻、査読無、27-30

額瀨千晶・森田美弥子、2011年、現代青年の友人への交流態度からみた S-HTP の描画特徴、心理臨床学研究 29巻、査読有、634-639

森田美弥子、2011年、ロールシャッハ・カード特性と継列分析、名古屋大学心理発達相談室紀要 26巻、査読無、13-17

額瀨千晶・森田美弥子、2010年、大学生における両親の養育態度と S-HTP の描画特徴の関連、臨床描画研究 25巻、査読有、128-145

[学会発表] (計15件)

鈴木郁子・大木茂・森田美弥子、2012年3月10日、超低出生体重児の就学前後の精神運動発達に関する縦断研究—学校でのお困りごとに関するアンケートと WISC 知能検査・描画検査結果との関係について—、第23回日本発達心理学会(名古屋国際会議場)

丸山圭子・山本明日香・森田美弥子ほか、2011年10月10日、日本とフィンランドの子どもにおける学校環境と QOL—中学生を対象に—、日本学校心理学会第13回大会(信州大学)

蒔田玲子・丸山圭子・森田美弥子ほか、2011年10月10日、日本とフィンランドの子どもにおける学校環境と QOL—小学校中学年を対象に—、日本学校心理学会第13回大会(信州大学)

大久保諒・坪井裕子・森田美弥子ほか、2011年10月10日、日本とフィンランドの子どもにおける学校生活の QOL、日本学校心理学会第13回大会(信州大学)

野村あすか・坪井裕子・森田美弥子ほか、2011年10月10日、ひきこもり傾向児の学校における自己像および対人関係の特徴—文章完成法を通して—、日本学校心理学会第13回大会(信州大学)

Ikuko Suzuki・Miyako Morita、2011年7月20日、Relationship between how to draw trees in the twice-application methods of the Tree-Test and personality traits、XXth International Congress of Rorschach and Projective Methods (国立オリンピック青少年センター 東京)

氏原寛・森田美弥子ほか、2010年10月31日、ロールシャッハ・テストを臨床にどう生かす

か、日本ロールシャッハ学会第14回大会(帝塚山学院大学)

鈴木郁子・森田美弥子、2010年9月21日、極低出生体重児のフォローアップ描画検査の縦断的検討、日本心理学会第74回大会(大阪大学)

森田美弥子、2010年9月16日、臨床心理査定教育の課題—何を・どのように・学ぶか—、日本臨床心理士養成大学院協議会第10回大会(アジュール竹芝 東京)

Miyako Morita・Shiho Iwai、2010年7月12日、A study on learning process of psychological assessment technique、27th International Congress of Applied Psychology (Melbourne Convention and Exhibition Centre オーストラリア)

高橋昇・森田美弥子、2011年3月26日、名大式技法を学ぶ—「思考・言語カテゴリー」を中心に—、名古屋ロールシャッハ研究会50周年記念大会(ウインクあいち 名古屋)

森田美弥子ほか、2009年11月1日、ロールシャッハ法の臨床的活用—各学派の特徴と実際—、日本ロールシャッハ学会第13回大会シンポジウム(大妻女子大学)

大賀梨紗・森田美弥子、2009年9月20日、ロールシャッハ・カード特性の再検討(3)—Content の出現傾向の分析から—、日本心理臨床学会第28回大会(東京国際フォーラム)

森田美弥子・大賀梨紗、2009年9月20日、ロールシャッハ・カード特性の再検討(4)—名大式ロールシャッハ法「感情カテゴリー」の特徴—、日本心理臨床学会第28回大会(東京国際フォーラム)

[図書] (計3件)

森田美弥子ほか、2010年、実践ロールシャッハ法—思考・言語カテゴリーの臨床的適用、ナカニシヤ出版、総頁数171頁

松本真理子・永田雅子ほか、2010年、子どもの臨床心理アセスメント—子ども・家族・学校支援のために、金剛出版、総頁数194頁

竹内健児・森田美弥子ほか、2009年、事例でわかる心理検査の伝え方・活かし方、金剛出版、総頁数210頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森田美弥子 (MORITA MIYAKO)

名古屋大学大学院教育発達科学研究科・教授
研究者番号：80210178

(2)研究分担者

永田雅子 (NAGATA MASAKO)

名古屋大学発達心理精神科学教育研究センター・准教授

研究者番号：20467260

(3)連携研究者 なし

(4)研究協力者

額瀨千晶 (KOUKETSU CHIAKI)
情報科学芸術大学院大学学生相談室・非常勤
相談員

大賀梨紗 (OOGA RISA)

愛知県女性相談センター・主査

岩井志保 (IWAI SHIHO)

児童養護施設 暁学園・臨床心理士

鈴木郁子 (SUZUKI IKUKO)

浜松学院大学・准教授